

考古学もデジタル時代

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



現場の実測図面の並ぶ保管棚 左下は図面45枚と同量のデータを入力したCD-R

はじめに 日本では、一年あたり約12,000件の発掘調査が行なわれています。そのほとんどは、道路を作ったり新しいビルを建てたりすることによって、地面の下にある遺跡が壊されるために行なわれる「緊急発掘調査」と呼ばれるもので、発掘調査終了後、遺跡は消滅し、我々はもう二度とその遺跡を見ることはできません。発掘調査では、「そこに遺跡が存在したという記録」を後世に残し、将来の研究に役立てるために、遺跡を

図面や写真などの記録として保存する「記録保存」が行なわれます。

アナログ情報 これまでの記録保存の方法は、写真や図面・日誌などの「人間が目で見えてわかる情報」、簡単に言ってしまうと「アナログ情報」がおもで、撮影された写真はプリントとフィルム、図面や日誌は紙に鉛筆を使って記録されていました。これらは、特別な機材や道具がなくても、手軽に記録できることが特長なのですが、その反面、発掘調査を重ねるにつ

れ、保管する資料の量がどんどん増えて、必要なものを探し出したる調べ直したりする為の管理が煩雑になってきています。

また、発掘調査の記録は、将来にわたって保存しておかなければならない重要なものなのですが、紙やフィルムは、使われている素材自体が長期間の保存には不向きなので、常に変色や破損という問題から離れることができません。みなさんも黄ばんで読みにくくなった手紙や日記、写っているも

のがよくわからない色あせた古い写真をご覧になったことがあるかと思いますが。もちろんそれらの資料も複製を作れば、一時的に問題を回避することはできるのですが、複製を作ることは大変な手間がかかり、結果として管理しなければならぬ記録の量も増えてしまいます。そして最も深刻なことは、複製された資料はオリジナルと比べてほんの少し違ったものになるということで、何回も複製を繰り返していくと、やがてオリジナルとはかなり異なったものになります。

デジタル情報 そこで最近注目されているのが、発掘調査で得られた記録をコンピュータで扱えるように数値に置き換えて「デジタル情報」として保存することです。

デジタル化された発掘情報は、コンピュータで利用することが可能ですから、必要な情報を膨大な記録の中から探したり、それらの完全な複製を作ることが簡単にできます。その際にも、アナログ情報のように複製による記録の劣化というもの全くありませんから、同じ記録を異なった場所で別々に保管し、火事や地震などの災害から貴重な記録を守ることが可能になります。

また、写真や図面もデジタル情報になれば変色もしませんし、インターネットを使えば、遠く離れたところに必要な情報を送ることも可能になります。

これからの記録保存 それでは発掘調査の記録がすぐに100%デジタル情報に置き換わってしまうかということ、そうではありません。



大判カラーポジフィルム 25 枚と同量のデータを入力した CD-R



現地での実測図の記録作業 (左) とパソコンを使った室内作業 (右)

これまでの記録方式には「誰でもどこでも簡単に使える」などの優れた長所があります。さらに、その方式を使って遺跡の記録を作成している人達も、長年その方法に慣れ親しんでいるので、しばらくはアナログとデジタルの記録方式が併用されていくと思います。

しかし、現在でも多くの情報がコンピュータを使って作成され、コンピュータやデジタルカメラなどのデジタル機器の性能向上は日

進歩なので、近い将来にはほとんどの記録がデジタル情報として作成されることでしょう。

これまでの考古学者のイメージといえば、フィールドブックにペンを持つスタイルを想像する方が多かったかも知れませんが、これからの、そう 21 世紀の考古学者のトレードマークは、ノートパソコンとデジタルカメラかも知れませんね (´_`)/

(宮原 健吾)